

夏休みひとり旅

「 信長の朽木谷・一目散 」

2012—8/31 ~ 9/3 遠藤俊一

信長は逃げた、一目散に逃げた。

元龜元年（1570年）4月28日の夜であった。

若狭・敦賀の天筒山城を落とし、続いて峰続きの金ヶ崎城をも落とし、明日は木の芽峠を越えて越前一乗谷の朝倉義景を討つ、その直前であった。

妹・お市の婿である浅井長政の裏切りに会い進退窮まった。腹背からの敵である。

情報収集を必死に行っただろう。浅井の裏切りは本当なのか。

このまま朝倉を攻めるか、それとも浅井を向え討つか。

信長は果敢に決断した。

そして一目散に逃げた。

従うものは騎馬武者10数騎のみ。

来た道をたどり、まず佐柿に。

そこで国吉城主・粟屋越中守を案内に立てて、熊川から峠を越えた。

浅井の勢力圏である琵琶湖には向わず西に右折して朽木谷に向った。

そこには朽木谷代々の領主である朽木元綱がいる。敵か味方かはっきりしない。

もし敵対すれば、この場での戦力の差は歴然としている。

信長の運命は朽木元綱に握られた、風前の灯であった。

だが強運かな信長は、無事味方につけて花折峠から大原の里、八瀬を経て京に逃げ帰った。

一目散に逃げ出して二日後の30日亥の下刻、つまり夜の11時ごろたどり着いた。

京を出陣した時は3万の大軍勢だったが戻った時はわずか10騎。

しかし、信長の天才度はこの決断でますます高まったことになった。



【信長の朝倉攻め経路】

赤線 は 復路

黒線 は 往路

織田信長は男のロマンだ。

信長は、今までのやり方には飽き足らず、古く良くないと思ったものをぶち壊しながら、新しく良いと思ったものを作り上げていった。

自分ひとりで考え、自分の思うままに実行していった。

歴史上、私の最も憧れる人物だ。

昨年、「政宗の仙道制覇」を旅し、それを書き上げた。

それを読んでくれた人に得意になって、「秀吉の中国攻め」、「信玄の信濃攻略」につぐ戦国武将シリーズ3部作だと話した。

すると、「信長はやらないの」という言葉が返ってきた。今年の春のことだった。

至極もったもなことだし、私自身がもっとも好きな歴史上の人物であり、戦国武将の代表者だ、私がはずすわけにはいかないなと思った。

では、信長の何を追っかけようかと考えた。

信長の城遍歴だと「那古屋城」、「清洲城」、「小牧城」、「岐阜城」、「安土城」になる。

清洲城、岐阜城、安土城はもう行っている。那古屋城と小牧城だけじゃ3泊4日はもたない、どうしたらいいのだろうかとはたと考えた。信長の城でなく、わかりやすい戦場で、できれば、自分なるべく行ってない土地を通りたい。

え〜と、信長にはどんなところがあったけな。

うん、「朝倉攻め」だ、「浅井の裏切り」だと浮かんできた。

あれなら越前、今の福井県との往復だからそのルートを追うには3泊4日くらいでいけるだろう。「よし、それにしよう」と決めた。

テーマはなんとしよう。たしか信長は朽木谷を通して逃げたんだよな。それもひとりでスタコラサッサと逃げちゃった。一目散に逃げちゃった。

よし、これでいこう！「信長の朽木谷・一目散」かくてテーマが決まりました。

でも、それからが大変。信長は朝倉攻めに当時の居城の岐阜城から行ったのかな、それとも京からか。それとどういうルートで行ったのか。地名がわかるかな。今の地名と一致しているのかな。そこへはどう行けばいいのかわかるかな。

こりゃ、いろいろと調べなければならぬことが一杯あるぞ。

今までよりも事前調査がずうっと多いぞ、こりゃ大変だと思った。

2012年8月31日午前10時28分、東海道新幹線“のぞみ15号”を降りた私は「京都駅」のJR湖西線ホームに向った。今年の夏休み一人旅「信長の朽木谷・一目散」の始まりだ。



【湖西線・京都駅】

信長は元龜元年（1570年）2月25日に岐阜を出発し、途中、近江の常楽寺（現滋賀県安土町）で相撲会を催し、30日にいったん京都入りした。

すでに彼は近畿地方の大名・国衆を中心に諸国の戦国大名たちに書状を送っている。

自分は正親町（おおぎまち）天皇、足利義昭將軍の御用を起こすので、武将達にも挨拶に來いと要請した。

まだ戦国の世だ。最高権力者も決まっていない。当然、多くの武将は応じない。越前（今の福井県北部）の朝倉義景もなしのつづてだった。信長は幕府の上意、朝廷の勅命により出撃した形を取った。それもどうやら朝倉ではなく、若狭（今の福井県南部）の武藤氏征伐の名目だったらしい。応じてきた徳川家康、北畠具房や自分の部下の明智光秀、羽柴秀吉、柴田勝家などと共に地元大和の松永久秀、摂津の池田勝正達も名を連ねた。従うもの3万の大軍勢だ。

4月20日の早朝、信長は京都を出陣し、琵琶湖の西岸を北上し、坂本を經由してその日は和邇（わに）（現滋賀県志賀町）で一泊、21日は田中（現高島郡安曇川町）泊、22日は若狭に入り、熊川（現福井県遠敷郡上中町）泊、23日は佐柿（現三方郡美浜町）に逗留したという。

【和邇駅】



【田中の交差点】

【熊川宿】



【佐柿のバス停】

琵琶湖の西岸を北上するというと、現在ではJR湖西線だ。私にとっては湖西線に乗るのは初めてだ。なにか気持ちがうきうきする。

10:45発、京都を出ると次の駅は「山科（やましな）」だった。山科というと「忠臣蔵」の大石内蔵助が住居し、廓（くるわ）遊びで京へ通ったところだ。うん、この位置にあったのか。

次が「大津」、滋賀県の県庁所在地だ。京都との距離はこんなに近いのか。日本での県庁

所在地間の距離では最短なのだろうなと感じた。

大津を出ると琵琶湖が見えてくる。いよいよ湖西を北上することになる。最初の目的地である「和邇（わに）」には11：16に到着した。信長の初日の宿营地だ。私は和邇に来た証拠として和邇駅の看板をとることにしていた。ホームでパチリ、改札口を出て駅舎の看板をパチリ、これで目的を達したことになる。が、それだけでは能がないので少し歩くことにしていた。



【和邇駅】



【天皇神社】

「天皇神社」(てんのうじんじゃ)、和邇駅から10分程歩いたところにあるという。名前に惹かれた。どの天皇を祀っているのだろう。駅から榎町商店街を歩くと「榎」と書いた碑があった。ここに宿場があったとも一里塚があったともいうらしい。その十字路を右折すると「天皇神社」に行き着く。今は「すさのおのみこと」を祀っているが、江戸時代では「牛頭天王(ごずてんのう)」が祭神だったので「牛頭天王社」「天王明神」と呼ばれていた。明治になって改称され祭神も変わった。

「てんのう違いだな」とつぶやいて後にした。

和邇川のほとりを歩き、橋を渡ると「小野神社・小野篁(たかむら)神社」だ。遣隋使で有名な小野妹子の一族を祀っている。小野氏系図の案内板が会ったが、私にとっては美人で有名な「小野小町の塔」の方に関心がある。

「ほう、彼女も小野一族だったか」

ここで和邇駅に帰ろうと思っていたが「道風(どうふう)神社」の矢印が目についた。近くに「小野神社飛地境内社道風神社本殿」があるという。小野の道風といえば藤原佐理(すけまさ)、藤原行成(ゆきなり)と共に三蹟といわれた字のお上手なお方だ。私も東信電気に入社した当時、早川宏、金子直弘とともに遠藤俊一は東信電気の三悪筆だといわれ、ワープロが出現した時には「君達のために出来たんじゃないの」とからかわれたほどだ。「ここをはずすわけにはいかないな」

道風神社本殿は切妻造りで天皇神社も小野神社も共に国の重要文化財だった。

ここで踵を返し、汗をぬぐいながら和邇駅に帰った。1時間40分くらいの散策でした。

駅に帰ると湖西線に遅れが生じていた。トラックが橋桁に衝突していてその点検でダイヤが乱れているようだ。でも、25分ほどの遅れですんで13：03発、近江舞子で乗り

継ぎ待ち、次の目的地「近江高島」駅に到着したのは午後2時前だった。



【ガリバー像】

駅前に小さな船を沢山引っ張っているガリバーの銅像が目立つ。近くに「ガリバー青少年旅行村」というのがある。ここではガリバーが売り物のようだ。そういえば、ホームに遠眼鏡で覗いているガリバー像があったっけ。

でも、私の目当ては「大溝城址」だ。今回の信長・朽木谷の時代より8年ほど後、信長が浅井・朝倉を滅ぼした後に、信長の甥信澄（のぶずみ）が築城した。明智光秀の設計といわれ、あの「本能寺の変」のあと信澄は光秀の娘を妻としていたため嫌疑を掛けられ大坂城で自害した。

駅から歩き出したが最初に「大溝城址」の矢印があったがそれからがない。不安になって一度戻った。駅前のレストランでお腹を作っておこう。冷し中華が欲しかったが、スパゲティにしようかと迷ったが、焼きそばにした。

店のお姉さんに道を聞き再出発だ。それでもなんか変だ、よくわからない。病院工事中の整理人に聞くと病院の駐車場の向こうだという。病院の敷地を入り駐車場を横切ると看板と旗印が見えた。ほんの数坪くらいの空間がちょっとした石垣で囲まれていた。弁当をつかっていたのか病院職員らしい人がいたが、遠慮するまでもなくそこはすぐ見終わった。得意の目をつぶってその時代にタイムスリップして織田信澄に会おうとしたが、あわただしくしていたせいか誰も出て来なかった。



【大溝城址】

再び湖西線に乗り隣駅の「安曇川（あどがわ）」に着いた。ここは信長の2泊目の「田中」だ。実は「田中」を探すのに苦労した。信長本でしらべて「田中」は滋賀県安曇川町というところまではわかった。でも、安曇川町のどこなんだ。これがわからない。それじゃ「田中」にいったという証拠の写真はどうしたらいいんだ。

おう、いい考えがあるぞ。

道路地図を持ってきて調べた。安曇川近辺をあちこち目をやってみた。

「あった！」、交差点で「田中」というのを見つけた。ここにはきっと信号機の上か下に「田中」って書いてあるだろう。そこを写真に取ればいい。私の自慢鼻がひくひくした。

地図で大体方向はわかっていたが、駅の構内に「観光案内所」の文字が目についた。

「まあ、念のため聞いてみよう」

案内所に入った。聞くというより、実は人と話したかったのかもしれない。私のプランを自慢げに聞いてもらいたかったのかもしれない。

しかし、ここで大変なことを耳にした。

「それなら、田中城跡がありますよ」

「えっ、本当、それだよ、きっと信長はそこに泊まったんだよ。そこ行くよ」

「ちょっと遠いですよ、歩いてはいけませんよ」

「いいよ、タクシーで行くよ」

駅前で客待ちのタクシーに乗った。

「運転手さん、田中城跡ってあるんだって、そこ行って。でも、その前に「田中」の交差点を通過ってね」

「お客さん、あそこが田中の交差点ですよ」

「うん、ここで止めて、ちょっと写真を撮ってくるよ」

「しめしめ、運転手さん田中って書いてあったよ、次、田中城跡に行って」



【田中の交差点】

「あっ、あそこに田中城跡って矢印看板があるよ、右折だ」

細い道を登ってゆくとすぐ行き止まりのようになり、民家の前に庭か空き地のようなスペースがありそこでストップだ。ここは違うのではないかと少しバックした。すると民家からおばさんが出てきてここに車を止めるとばかりに手招きをした。運転手が話をしてきて手前のさらに細い道が田中城跡への入り口という。

そこに行くとフェンスがあり扉がついている。その扉の脇に「田中城跡」の碑がひっそりと座っていた。

「ここか、やっとたどりついたな」

早速、碑をパチリとやった。私のコレクションが思いがけず一つ増えた。



【田中城址碑】

「お客さん、中に入りますか」 運転手が聞いてきた。

「もちろん入るよ。でも、時間がないからすぐ帰ってくるよ」

「さっきの奥さんが熊に気をつけろって言ってましたよ」

「えっ、だ・だいじょうぶだよ、そ・そんなもの、へ・へいだよ」

フェンスの金扉を開けようとしたら赤い文字が目に入ってきた。

「さわるな、危険、高圧電力」とある。

おもわず、自分の手を引っ込めた。

「運転手さんここ開けてくれる、手袋してるよね」

熊と高圧電力に出鼻をくじかれてしまった。

落ちていた小枝を護身用の杖にしておっかなびっくりで山道を少し登っていった。

7, 8分くらいだろうか、もういいよな、ちゃんと田中城跡に来たんだからと自分に言い聞かせて逆戻りした。

待たせておいたタクシーに乗り、先ほどの矢印看板のところに戻る。

田中城跡の説明が書いてあった。そこには信長が逗留したと書いてある。

もう、嬉しくなる。田中城は標高220メートルあるが比高は60メートルだから小高い丘程度だ。信長が朽木谷から逃げ帰った後は、浅井の勢力下に入り元龜4年というから3年後に信長が攻略した。明智光秀の支配下に入り終焉を迎えたとある。後に秀吉、家康に仕え岡崎城主、柳川城主になった田中吉政はこの城の主だった田中氏の流れをくんでいるという。

「得しちゃったな～、ここは元々計画になかったのに」



【田中城の案内板】

「安曇川」から「近江今津」に着く、もう16:20になっている。

16:45 発 JRバス「小浜行き」に乗る。4～5人の乗客だった。町並みはすぐなくなり、田の稲穂もしばらく行くと見えなくなった。そして山道を登ることになる。やがて標識が見えてきた。左に行くと「朽木谷」とある。「帰りはこの道を行くんだな」

トンネルを抜けると福井県になった。抜けてすぐに熊川宿だ。「若狭熊川」のバス停には17:14 到着だった。

国道にバス停の小屋があるだけで何にもない。どちらに行けばいいのか少し悩んだが、案内図と方向を反対に見ていたのに気づき、少し上方にある駐車場を突っ切って宿場町に出た。

今度は宿舎の「逸見勘兵衛の家」がわからない。古い家並みが続く熊川宿で人通りはない。お店の中にいた人に聞いた。丁寧に教えてもらったが、間違えて隣の旧館をたたく。ここは後でわかったことだが「熊川宿資料館」だった。ようやくその隣にあった「逸見勘兵衛の家」に着いた。



【熊川宿】



ところが店はもう閉まっている。出入り口らしきところをやさしくたたいてみたが案の定返事はない。人がいそうにない。途方にくれるとはこういうときに言うのだろう。しばらくたたずんでみると、さっき店で道を教えてくれた人が通りかかった。私が物言いたそうにしていると、どうしたんだと聞いてくれた。わけを言うと、ちょっと待っていて連れてくるからと引き返していった。しばらくして二人の年配の女性を連れてきた。

どう見ても普通の家のおばさん達だ。彼女達は逸見勘兵衛の店の人でいつも通り夕方5時に店を閉めたという。私の泊まるのを知っていたが電話がなかったので家に帰ったという。とりあえず、私は謝った。中に入れというが心配事があった。食事である。朝食は出すが夕食は外で食べてきて欲しいというのがこの宿を手配してくれた秘書の小野寺さんの話だった。私は簡単に考えていたが、周りを見るとどう見たって食事を食べさせそうなところがない。みんな店も閉まっている。その旨を言うと、歩いて10分くらいの所に“道の駅・熊川宿”があるという。ただ、夕方6時までだと思ふよという。もう、5時40分くらいになっていた。荷物を置いて食べていらっしやい、そのあいだにお風呂を沸かしておきますとの事だった。もう必死です。夕食にありつけなかったら大変だ。急ぎ足で道の駅に行った。6時30分までやっていますとの事だった。

焼き鯖寿司セットを頼む。名物の鯖寿司とうどんをすすってやれー安心。ついでにデザートでくず羊羹を食べた。なかなか美味しい。土産にとも思ったがまだ先は長い、あとま

わし。

宿に帰ると、さっきのおばさんが2階の部屋に案内してくれた。後でわかったことだが、1階がみやげ物屋のようでそれに居間だろうか、あとは台所とテレビが置いてあるホール。2階が宿泊所になっている。2階には部屋が3室、管理人室一部屋、それに洗面所、トイレ、浴室があった。

この家は正式には、「旧逸見勘兵衛家住宅」といって江戸時代末期、安政5年(1858)に建てられた。熊川村の初代村長逸見勘兵衛の生家でその子息で伊藤忠商事二代目社長の伊藤竹之助の生家でもある。

この建物を伝統的建築の中に住み続けていくためのモデルハウスとして設計もし、現在は公開しており、また交流の場ともなっている。そしてこの地での唯一の宿ともなっているようだ。一通り説明してお風呂も沸いていますとっておばさんは帰っていった。管理人の方は京都に行っていて今日の夜11時ころに帰ってきますと付け加えた。

この広いところに私一人だけが残った。

風呂に入る。ずっと小さなユニットバスだったが、それよりもなによりも、この広い家に自分ひとりが素っ裸でいるということが、なにか落ち着かなかった。

風呂から上がる。何もすることがない。音も聞こえない。しばらく、ぼけーとしていたが耐えられなくなって家に電話した。奥方が不在だったので、寂しいよと留守電に入れておいた。

管理人は11時前に帰ってきた。明日9/1はこの村の防災訓練の日です。朝の9時にサイレンが鳴ってみんな飛び出してゆきますと申し訳なさそうにいった。

「大丈夫ですよ、その前に出立しますから」といっておいた。

9月1日になった。朝食は鱈の干物と卵焼き、お漬物と味噌汁だった。食べ終わって管理人さんとうまく談笑できた。まずは(熊川宿「勘兵衛」友の会)の会員証をくれた。会員番号450、つまり450人目のお客だったのか。次からは1割引の特典があるそうだが、さてもう一度来る事があるだろうか。

それよりもここでまたとんでもないことを聞いた。熊川城があったんだ。私が今度の旅のテーマをいい、信長の追っかけをやっているというと、

「それなら、ここに熊川城があったんですよ」

「えっ、熊川城って実際にあったんですか、どこですか」

「すぐ裏ですよ、白石神社の裏ですよ」

「行きたいですね、登れるんですか」

「ええ、でも結構道が崩れてますがね、登れないことはないでしょう」

もう、9時近くになっている。防災訓練の前に失礼しないといけないなと宿を後にした。

ザックをかついで歩き出す。白石神社、松木神社、義民館、得法寺とまわる。得法寺には熊川城主・沼田氏の供養塔があった。先祖は上野（こうずけ）の国から来たとあるから今の群馬県沼田市だったのだろうと思った。「家康・腰掛の松」というのもあった。

「なるほど、家康は信長と一緒にここに来た。そして得法寺に泊まり、信長は熊川城か」

途中で自警団らしい人にあった。アンケート用紙に名前、住所などを書かされた。防災訓練は観光客も被害にあったという想定を立てているので、係りに会ったら渡してくれといわれた。歩いている途中でサイレンが鳴って防災訓練が始まったようだ。そここに村の人たちが集まっている。邪魔をしないように歩いたがアンケートのことは、結局誰にも言われずにあの同じ人に渡すことになった。

熊川城が見つからない。

たまたま防災訓練に集まっていた宿の管理人に出会ったので聞いてみた。

さっき行った白石神社の裏だと指差された。

行ってみると道らしきものがあったが、案内板はなく、崖のようなところで細く、崩れているところもある。しばらく登ったが、またも熊の事を思い出す。ここらも出るそうだ。

「もういいよな、ここまで登ったら熊川城址に来たことになるからな、ちょっと物騒だし」熊のせいにして、ターン・バック。



【熊川城址の看板】



【熊川城への山道】

宿場館を見物して、バスの時刻 9 : 54 に合わせて熊川宿を後にした。

上中駅に 10 : 05 到着。10 : 12 発、JR 小浜線に乗り 10 : 30 美浜駅に着く。

いま、原発で有名なところだ。でも私の目的地は「佐柿」の国吉城だ。

さっそく駅前のタクシーに乗り、

「運転手さん、佐柿の陣屋跡に行って、それから国吉城ね」

「佐柿はあるけど、陣屋跡ね～、あったっけな～」

「いいから、行って」



【佐柿の案内板】

陣屋跡はいま「若狭国吉城歴史資料館」になっている。

「難攻不落・国吉城」の旗指物があちこちになびいている。若狭守護大名武田氏の重臣であった粟屋越中守勝久が築き、10年間に渡り攻め寄せる越前朝倉勢を相手に壮絶な籠城戦を繰り広げ守り抜いた。信長の朝倉攻めのとき、熊川の次の宿泊地である佐柿（さがき）とはこの地である。



【歴史博物館】



【国吉城址】

粟屋越中守勝久は信長勢を倉見峠まで出迎え、共に国吉城に入った。4月23日のことだった。そして2日間この城で越前攻めの戦略を練って4月25日越前国に向けて出陣していった。若狭の武藤氏を攻めるのなら西へ向うはずだが、東の敦賀に向ったということは最初から狙いは朝倉氏にあったということになる。

この難攻不落の国吉城の本丸跡まで登ることにした。

資料館の隣が登城口だった。横に館あとがある。掘り起こした土の遺跡である。ここで信長は宿泊したのであろうか。中世の山城らしい山道を登る。汗をかきながら3～40分ほど登ると本丸跡だ。碑をパチリとやって下山する。

12:40に美浜駅を出発して田園風景の中、信長軍の行軍を思いながらJRで敦賀を目指した。

「敦賀マンテンホテル駅前」にチェックインする。このホテルに2泊する予定だ。荷を降ろして昼食を取りに駅前あたりを歩く。海鮮料理屋で海鮮丼を食べる。帰り道に路地を通ると“おでん”の暖簾が目に入った。カウンターくらいしかなさそうな小ぶりの店だ。夜はここにしようかと思いながらホテルに帰った。

敦賀に攻め入った信長はその日のうちに天筒山城を落とす。

翌26日、峰続きの金ヶ崎城を攻略。するとその南にあった引壇城（ひきたじょう）も守兵が逃亡してこの地をたった二日間で制圧した。そして明日は木の芽峠を越えて越前の朝倉攻めだということだった。

そこに浅井長政の裏切りで、ここに「金ヶ崎の退き口（のきぐち）」がはじまるということになった。信長の一目散である。元龜元年4月30日夜更けに信長は京に逃げ帰った。

昼食が終わった私は早速タクシーを呼んで天筒山に向った。

上り口は舗装されていたが、急な上りである。喘ぎながら息をつきつきそれでも2～30分で登りついた。途中で見下ろしたところが中池見湿原で、意表をついて、あそこから秀吉や丹羽長秀たちが攻め上ったのだなと一息ついた。

円柱形の展望台があるところが天筒山城の本丸あたりになるのだろうか。そこからは峰伝いに金ヶ崎城に続いている。ここを攻め取られては金ヶ崎城の将兵は絶望的だったろう。



【天筒山展望台】



【月見御殿跡】

一旦降りてまた登ったところが金ヶ崎城跡だった。今は月見御殿跡と呼ばれている本丸跡から見ると下にはトラックヤードと海が見える。当時は直接海岸線が来ていたのだろう。

降りたところの金崎宮には両端を紐で縛った守り袋をお守りとして売っていた。お市が兄信長に急を知らせるために送った暗号代わりの袋である。まあこんなのは作り話だろうなとは思っているが面白い。

駐車場にあるトイレについたときにわか雨になった。もう少し遅れていたらびしょ濡れになるところだった。またまたわが強運を思う。信長並みだ。ケータイでタクシーを呼びホテルに帰る。明日は木の芽峠だな。

9月2日、第3日、信長の一目散は1日目、2日目、4日目で追いかけることになるので今日はおまけの日である。せっかく敦賀まで行くのだからこの1日で懸案の場所も片付けておこうという計画である。

城、私の城好きはこの地の丸岡城と越前大野城をほっておく訳には行かない。それに木の芽峠もハイキングしたい。すると道順は木の芽峠を通り、福井から一乗谷（いちじょうだに）を通過して越前大野城、また福井に帰り丸岡城に行き福井から敦賀に帰ることになる。

一目散の時から3年後、天正元年（1573年）8月、信長軍は怒涛の勢いで木の芽峠を越えて朝倉義景の本拠、一乗谷に攻め込んだ。義景はかなわぬとみて一族の朝倉景鏡（かげあきら）の誘いにのりその居城である大野郡山田庄（いまの越前大野）に逃げた。しかし景鏡は裏切り、義景を切腹に追い込んだ。義景の母親と嫡男も探し出されて斬られた。ここに朝倉氏は滅びた。まあ、景鏡も裏切りの報いか翌年一揆に襲われ死ぬことに成る。

9月2日午前9時、木の芽峠に向う。コミュニティーバスで行こうとしたが1日に数本しかないのでタクシーにした。運ちゃんは30歳代であろうか朴訥とした好青年だった。バスの運転手もしており、高校生の課外授業で木の芽峠越えのハイキング用のバスによく駆り出されるといっていた。料金はメーターでなく3時間契約の方がお得ですよと親切だ。

途中で新保陣屋に寄ってもらうことにした。幕末に天狗党が乱を起こし、水戸からこの越前まで流浪し投降し、棟梁の武田耕雲斎が謹慎した所だ。木の芽峠のすぐ下の部落の細い道沿いに瓦葺の家と門があり、「武田耕雲斎の本陣跡」と書いてある碑が立っていた。



【新保陣屋】
武田耕雲斎の本陣跡

そこをちょいの間見学してから10分ほどでタクシーは止まった。

「生徒さんたちはここから登っていきます。1時間ほどで降りてきてくださいね」
「わかった」



【木の芽古道の案内板】

木の芽峠は福井県の嶺北（れいほく）地方と嶺南（れいなん）地方の分水嶺でもある。時間は10時であった。木の芽古道の案内板をざっと見て歩き始める。うん、木の芽峠を歩けるぞ。ここを信長軍も超えていったのだなと嬉しくなる。こういうときは本当に幸せを感じる。が、それもすぐに変わってくる。汗がたらたら、息が弾む、ふくらはぎが張ってくる。“止めとけばよかったかな”いつも出てくる感情だ。それと戦いながら足を進めさせる。

巨大な自然石が谷川の脇にありツメカキ地蔵というそうだが弘法大師が彫ったという像はよくわからなかった。

御膳水（ごぜんすい）というのがあった。親鸞が錫杖で地面をついたら湧水が出た、後年、明治天皇がその水を供したのでそう呼ばれているそうだ。飲もうと思ったが、汚いし、膝を突いても届かなかったので止めた。

40分も歩いたろうか、犬のほえる声がある。私に向ってほえているようだが人家は近いぞと元気が出る。峠に出た。犬はまだほえている。茶店なのか個人宅なのかわからない家が建っている。普通、暖簾でも出ているもんなのに。道脇に道元禅師の像が立ってい

た。真っ直ぐ行く道の向こうには町並みが見下ろせた。越前への道だ。信長軍が進撃していったのだろうかと思った。

でも、時間がない。左へ行く道があった。どこへ行くのかな、ちょっとだけ行ってみるか。細道の草を分けながら進むと「観音丸城址」と看板があった。おっ、コレクションがまた増えるぞとパチリ。さらに進むと「鉢伏城址」の矢印看板があった。あっそうか、事前に調べた時、木の芽峠のそばに鉢伏城址があったことをここで思い出した。時間がない、そこは止めUターンだ。



【観音丸城址】



【鉢伏城址矢印看板】

もう11時ちょっと前になっている。気をもんでいる運ちゃんの顔が浮かんでくる。急ぎ足で下山する。下りは早い。あっという間についた気がする。11時20分だ、20分ちょっとで降りちゃった。それでも木の芽峠を歩いたという満足感が残った。

今庄の駅まで送ってもらった。11:54発で福井には12:27到着。なにやら無性にラーメンが食べたくなった。途中下車して食べようと思ったが、まず越前大野への時刻を調べようと駅通路の時刻表を見る。なにか、12:49発、20分しかないではないか。その次は1時間以上先だ。だめ、外に出てるひまはない。駅の立ち食いうどんにしよう。そこそこにして九頭竜線に飛び乗った。

4年前の8月に私はこの九頭竜線に乗っている。洋介のお葬式に出てすぐこちらに向った。当時、まだ足を踏み入れていない県庁所在地が4つあった。その福井市と津市を訪れるついでに福井では柴田勝家の北の庄と朝倉義景の一乗谷へ行こうと計画した。北の庄は福井市にあるが一乗谷の館跡は九頭竜線の「一乗谷駅」にあった。そこから歩いていったことを思い出した。

一乗谷は足羽川の支流の一乗谷川に沿った南北約5km、幅は広いところでも約500mの狭い谷間である。谷のせまいところの南北に城戸(きど)と呼ばれる土塁、石垣を築いた。その間が城下町だ。その東方、海拔473mのところの山城を設けたが、普段は城戸内の館が中心だった。

4年前にここを歩き回った私は発掘された遺跡や館跡、庭園跡、復元された武家屋敷などに往時を思い悦にいていたが、どうしても思ってしまうのは、一乗谷の地形的なスケ

ールの小ささだった。信長が目的に合わせて次々に城を代えていったに対し、朝倉はこの狭いところにこだわったので滅ぼされて当然かとも思った。それでも私は違う意味で感激していた。ここに足利義昭が居た。明智光秀も細川藤孝もいて織田信長が使いを出した。ここから足利義昭は岐阜の信長のところに行ったんだ。目をつぶってその情景の中にすっかり溶け込んだ。遺跡めぐりの楽しさにずっばりと浸った瞬間だった。

その「一乗谷駅」を素通りして九頭竜線は進んでゆく。
雨がふってきた。「越前大野駅」に着いた時は土砂降りになっていた。
降りた人たちは皆駅舎で雨宿りをしている。13:45、帰りの時刻を見ると15:05だ。次は1時間以上先だ。どうしてもこれに乗らねばならない。
自分は傘を持ってきたぞ。雨の城歩きもすてたもんじゃない。
「よし行くぞ、へい！ タクシー！ 越前大野城へ！」

駅から300mほどいったところに日吉神社があるそうで、ここが中世に亥山城（いやまじょう）があった。朝倉景鏡の居城だったというから朝倉義景はここに来て、そして切腹したのだろう。

「う～ん、でも、今日は寄らない、時間がないから」
運転手が朝倉義景のお墓が公園の中にあるのですがとってきたが「あとにする」といって越前大野城に向った。この町は「越前の小京都」と呼ばれているが、雨だし、時間もないし、ひたすらお城に向った。



【越前大野城】

越前大野城は天正3年（1575年）に金森長近が信長からこの地を所領として与えられ、翌4年亀山に城郭を築き、山頂に大野城を置いた。信長が朝倉義景を滅ぼしてから2年後のことだ。

南上り口でタクシーを降り、傘を広げて、ひたすら天守閣への近道、階段道を急いだ。所要時間20分とあるがもっと早くについた。

雫の滴る傘をたたんで天守に入る。階段を上る。外は雨に煙っていてあまり見通せない。室内には各地の天守閣の写真が例によって飾ってある。

「よし、これで越前大野城は片付けたぞ。いつも、行ってないなと目障りだったからな」

天守にいるうちにケータイでタクシーを予約して南上り口まで降りた。
タクシーはすぐには来ず、ひやひやしたが何とか列車には滑り込んだ。

福井駅には 16:00 到着、16:17 発北陸本線で敦賀とは反対方向の「丸岡」に行く。
16:29 着、駅前のタクシーで丸岡城へ。10 分ほどで到着。すぐ近くの入場券売り場へ。
閉門時間は 17:00 である。二人の年配女性が店じまいに入っていた。

「天守にいきたいんですか」

「ぜひ行きたいんです」

「わかりました、まだ数分前ですから」

天守の入り口まで来て扉を開けてくれた。

と、そのとき、二人ずれの若い男女が一緒に入ろうとした。

「お客さん、入場券持っていますか」

「いいえ」

「もう閉館ですから、この人は時間内に入場券を買ったんですよ」

あわれ、二人は入れてもらえなかった。

滑り込みセーフの私は城内へ。



丸岡城は天正 4 年（1576）というから越前大野城と同じ年だ、北庄（きたのしょう）
城の支城として柴田勝家の甥勝豊（かつとよ）によって築城された平山城である。

1934 年（昭和 9 年）に国宝天守閣第 1 号に指定されたが 1948 年の福井大震災によって倒
壊し、1950 年に国の重要文化財に指定されている。2 層 3 階望楼型独立式である。

別名「霞ヶ城（かすみがじょう）」とよばれて桜の季節には霞に浮かぶ城の眺めは格別で「日
本さくら名所 100 選」にも選ばれているそうだ。

現存する 12 の天守閣のうちでもっとも古く、各地の天守閣写真には必ず載っている。

天守は板塀で、屋根が石瓦なども珍しい。さすがに現存天守閣で規模はそれほど大きくは
ないが趣があって気に入った。

天守の下には「一筆啓上碑」があった。徳川家康の家臣で武名も高い本多作佐衛門重次
が戦場から留守を預かる妻に送った手紙である。簡潔にして要領を得た文例として名高い。

「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」

待たせておいた先ほどのタクシーで丸岡駅へ。17:20 発の北陸本線で敦賀へ。

18:39 敦賀に到着、昨日チェックインした「敦賀マンテンホテル」に戻る。

ひとつ風呂浴びて食事に繰り出す。どうも最近では連泊すると同じ店に向かう癖が出来た
みたいだ。昨日に続いてあの路地のおでん屋だ。親父とお姉さんがいてカウンター席のみ
でこじんまりとした店だった。7~8 人も入れればいっぱいになる。先客が 2 組いて忙しそう
だった。おやじもぶっきらぼうだったが、それでもお姉さんが少しだけ話し相手になっ
てくれた。その店にまた行くことにした。おでんと少しだけお姉さんが気になった。

小ぶりのドアを開けると先客は一人だけだった。黙ってこちらを向いたお店の女性はもうおばあさんといってもいい人だった。昨日は彼女の休みの日でお手伝いさんを頼んだようだ。要するにおやじの奥さんのようだ。

「昨日のおでんがおいしかったからまた来ましたよ」

そういうと親父は私がわかったようで今日はやけに愛想がいい。

今日は話し相手を親父にして夜は更けてゆきました。

平成24年(2012年)9月3日午前9時30分、敦賀駅前の宿舎前にあるレンタカー屋でトヨタ・プリウスを借りて、いざ、出発。今日が今回の一人旅最終日だ。

快晴の中、おっかなびっくりで車を動かす。

国道27号線を美浜に向う。いま、原発で話題を賑わしている土地の一つでもある。

観光地としては三方五湖の拠点でもある。

三方五湖はもう10年前にもなるか、私が見残した最後の有名観光地と言った所だ。

だがこの地は信長の時代、佐柿(さがき)といった。

バス停「佐柿」で一時停車、パチリとバカチョンカメラ。

すぐに熊川宿への峠道に向う。

熊川宿で一休み。3日前に宿泊したところだ。

取り残した写真と名物“くず羊羹”をお土産に買って出発。

トンネルを抜けるとすぐに分かれ道になる。右折して、来た時の湖西方面でなく朽木方面に進路を取る。

山道を下る。しばらく行くと、もう朽木に入る。めざす朽木陣屋跡もすぐにわかった。

朽木元綱はあのかき織田信長の命運を握った男として有名だが、次に歴史に出てくるのは関ヶ原の戦いだ。

はじめ西軍に属し、松尾山の麓に陣取った。後方の山頂には小早川秀秋がいた。小早川の裏切りで押し出されるように西軍の大谷刑部吉嗣を攻めた。人の運命の分かれ道に縁ある男のようだ。その朽木元綱の陣屋跡だった。



【朽木資料館】



【朽木陣屋跡】

木製の冠木門をくぐると「朽木資料館」がある。右脇には遺跡のような跡地に草が茂っていた。記念館は月曜日が定休日であって閉まっていた。しまったと思ったが後の祭り。

適当に歩き回っていると、作業服を着た人が近寄ってきた。役場のひとで、休みなので雑草を刈りに来たという。私の目的をきいて後から資料を送ろうと親切に言ってくれた。

興聖寺（こうしょうじ）による。駐車場から坂を上って見所という旧秀隣寺庭園に行ったが何かぱっとしないので入らず、門の前からそれなりの田園風景を見て食事をすることにした。鮎の塩焼きを平らげて朽木谷を後にする。

花折峠をすぎて大原の里に入る。もう、京都だ。三千院や寂光院はもう行っている。だから大原を素通りすると八瀬だ。天皇陛下の八瀬童子で有名だ。今年の1月に妻と泊まったエキシブ京都八瀬離宮でトイレ休憩を試みたが何か気に入らず、そのまま京都駅そばのレンタカー営業所まで直行した。

午後3時過ぎだっただろうか。信長が二日間、追っ手や地侍たちの反攻を気にしつつ、山道、悪路をほうほうの呈で逃げ帰った道を、私はあっという間に京都帰還した。



【京都駅に到着】

織田信長は私の最も憧れる歴史上の人物だが、彼のよさは何も成功者としてだけではない。この一目散の年は元龜元年だったが、それから元龜4年までの3年間は信長の最も苦しかった時代だ。浅井・朝倉だけでなく、本願寺、延暦寺、そして武田信玄、遠くに安芸の毛利氏、その中心にいた將軍足利義昭。信長包囲網が強固に築かれた時代だった。それを信長は強気一辺倒だけでなく引く時は引く、政治力も盛んに使い和戦両様で対処した。武田信玄の死という幸運も味方にして凌いでいった。

経済界でも成長の時より停滞の時期がより難しい。
攻めの戦略より撤退の戦略がより困難だといわれる。
私も社長業26年間でそれを何回も体験した。
困難は必ずどこかで何回もやってくる。
その困難を乗り越えてこそ明るい未来が待っている。

信長の危機回避の道のりを辿った今回の“夏休み一人旅”だった。
朽木陣屋跡で私の特技である“目をつぶってその時代にタイムスリップした”
信長が騎馬に跨り朽木谷を駆け抜けていった姿が現れた。
瞬きをしたら、一瞬の間だけ信長の顔が私になり、そしてすぐ消えた。